

氏名(国籍)	金 熹 成 (韓 国)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博甲第3264号
学位授与年月日	平成15年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	状態述語文の他動化と使役化

主査	筑波大学教授	博士(文学)	湯澤 質 幸
副査	筑波大学教授		高田 誠
副査	筑波大学教授	博士(言語学)	鷺尾 龍 一
副査	筑波大学助教授	Ph. D.	竹沢 幸 一
副査	筑波大学助教授		杉本 武

論文の内容の要旨

日本語における他動化や使役化に関する従来の研究は主として動詞述語文を対象として行われており、状態述語文を対象とした研究はこれまでほとんどなされてこなかった。しかし、他動化と使役化の全体像を明らかにするためには、言うまでもなく、状態述語文の他動化と使役化をも視野に入れて論じなければならない。本論文はこのような現状を踏まえて、「ある状態を別の関与者が引き起こす」ということをどのように表すかという、状態述語文の他動化と使役化の問題を取り上げ、その構文的特徴と意味的特徴の解明を目的としている。

本論文の構成は以下のとおりである。

第1章 序論－本論文の目的と意義－

他動化・使役化の研究における本論文の目的と意義、及び研究対象と研究方法を述べるとともに、本論文全体の構成を示す。

第2章 他動性と使役性

他動性と使役性に関する先行研究を検討し、本論文の立場を明示する。また、状態とはどのように定義されるのか、そして、状態述語文の他動化と使役化における状態述語文とは、どのような文をその範疇に含むのかについて規定を行う。すなわち、他動性と使役性に関しては、Shibatani (1976)、ヤコブセン (1989)、角田 (1991) などの先行研究に基づきながら、他動性と使役性の類似点と相違点について議論する。まず、他動性と他動詞、使役性と「(s) ase」の関係について述べ、類似点として、両者には「働きかけの段階」と「変化の段階」の二つが存在し、それらには因果関係が成り立っていることを述べる。相違点としては、他動性の場合には主語の働きかけ(コントロール)が「働きかけの段階」と「変化の段階」の両方に及ぶが、使役性の場合には主語(使役主)の働きかけ(コントロール)が「働きかけの段階」にしか及ばず、「変化の段階」を起こす主体となるのは被使役者であることを述べる。次に、状態述語文の他動化と使役化における「状態述語文」とは、単純現在形で現在の状態を表せる文を指し、範疇として、(1) 述語が「形容詞・形容動詞、名詞+だ」で構成される文、(2) 述語が「動詞+ない」、「動詞+やすい/に

くい」,「動詞+たい」などで構成される文,(3) 述語が可能動詞,「可能動詞+ない」で構成される文,(4) 述語が状態動詞で構成される文があることを示す。

第3章 状態述語文の他動化と使役化 I - 1 - 「～くする」「～くさせる」 -

述語が形容詞, 形容動詞, 「名詞+だ」で構成される状態述語文の他動化と使役化に関して考察を行い, その構文的特徴と意味的特徴を明らかにする。状態述語文の他動化は「する」が後続することによって, 使役化は「させる」が後続することによって行われることを指摘する。具体的には, 状態述語文「YがZだ(い)」で表される状態を「X」という別の関与者が引き起こすことを表そうとするなら, 他動文「XがYをZに(く)する」や使役文「XがYをZに(く)させる」の形式を用いることができることを述べる。他動文「XがYをZに(く)する」と使役文「XがYをZに(く)させる」は, 構文的には自動文「YがZに(く)なる」と自他と使役の関係にあることを指摘し, そして, そこには「なる」と「する」の自他関係に加えて, 「なる」と「させる」の使役関係という新たな対応関係が成り立っていることを示す。つまり, 「状態」を直接他動化・使役化することはできないこと, すなわち, 「状態変化」という過程が「状態」と「他動化・使役化」の間に存在することを述べる。意味的には他動文「XがYをZに(く)する」と使役文「XがYをZに(く)させる」は, 「X」が「Y」に働きかけて「Y」を「Z」という状態に変化させることを表すが, 「X」の意味役割が「動作主」である「動作主型」では他動化のみが成立し, 「X」の意味役割が「原因」である「原因型」では使役化や他動化がある条件のもとでのみ成立することを述べる。また, 他動化だけが許されるはずのところでは使役化が許される場合や, 使役化のみが許されるはずのところでは他動化が許されるという現象については, 「Y」の性質や「Z」の性質がかかわっていることを指摘する。

第4章 状態述語文の他動化と使役化 I - 2 - 「～くする」「～くさせる」 -

述語が「動詞+ない」「動詞+やすい/にくい」「動詞+たい」などで構成される状態述語文の他動化と使役化を, 「～に(く)する」「～に(く)させる」構文を用いて考察する。構文的には, 第3章で明らかにした「なる」と「する」, 「なる」と「させる」の自他と使役の関係がここでも適用されることを述べる。さらに, 「動詞+ない」の他動化と使役化に関しては, 他動化と使役化が成立するための意味的条件と構文的条件を提示する。意味的条件とは, 「動詞+ない」が主語名詞句の状態や性質・属性を表すこと, すなわち状態性を持たなければならないということである。具体的には, 「動詞+ない」の動詞が持つ状態性が強ければ強いほど「動詞+ない」全体の状態性も強くなり, 他動化と使役化が成立しやすくなることを指摘する。構文的条件とは, 「動詞+ない」における動詞が一項述語でなければならないということである。動詞が二項述語の場合, 他動化は「二重ヲ格制約」のため成立せず, 使役化は被使役者の「に」格が動作主の意味役割を持たなければならないという制約を守れなくなり, 結局成立しないことを論じる。なお, 「否定(ない)+使役((s)ase)」と「使役((s)ase)+否定(ない)」の意味的な違いを, 「ない」のスキープの違いによって説明する。さらに, 「動詞+やすい/にくい」「動詞+たい」の他動化と使役化においても, 「動詞+ない」の場合と同様に, 意味的条件と構文的条件がかかわっていることを明らかにする。

第5章 状態述語文の他動化と使役化 II - 「～ようにする」「～ようにさせる」 -

「ように」に「する」, 「させる」の後続した「ようにする」「ようにさせる」が, 他動化, 使役化の形式として用いられていることを分析する。「～ようにする」「～ようにさせる」構文の特徴は, 様々な種類の文を補文にとることができるという点にある。もちろん, 状態述語文もその対象となる。そこで, 状態述語文の他動化と使役化という観点から, 「～ようにする」「～ようにさせる」構文を考察し, その構文的特徴と意味的特徴を明らかにする。構文的には, 「～ように」が補文化辞としての役割を担い, 補文が他動化と使役化の結果を表すこと, また, 第3章や第4章で述べた「なる」と「する」, 「なる」と「させる」の自他と使役の関係がここでも観察されることを指摘する。すなわち, 「～ようになる」と「～ようにする」

が自他関係に、「～ようになる」と「～ようにさせる」が使役関係にあることを論じる。意味的には、「動詞 + ((s) ase)」構文との比較などを通して、この形式は補文主語の状態変化を表す特徴があることを明らかにする。

第6章 状態述語文の他動化と使役化Ⅲ－形容詞派生動詞－

形容詞から派生された自動詞と他動詞の自他と使役の関係を考察する。この場合における自他と使役の関係は、本論文で提示している状態述語文の他動化と使役化における自他と使役の関係と平行していることを論じ、状態述語文の他動化と使役化の派生関係が語彙レベルにおいて検証されることを述べる。具体的には、自動詞「形容詞語幹+まる」と他動詞「形容詞語幹+める」は自他関係にあること、自動詞「形容詞語幹+まる」と「形容詞語幹+まらせる」は使役関係にあるが、これは、「YがZに(く)なる」と「XがYをZに(く)する」が自他関係に、「YがZに(く)なる」と「XがYをZに(く)させる」が使役関係にあることと平行していることを指摘する。さらに、「形容詞語幹+める」は、「行為の過程に焦点が置かれる」表現であり、「形容詞語幹+くする」は、「行為の結果に焦点が置かれる」表現であるという意味的特徴を指摘し、この特徴に基づいて両形式の意味的対立を説明する。

第7章 結論

第6章までにおいて考察を行った状態述語文の他動化と使役化についての検討を踏まえて、「～に(く)する」「～(に)くさせる」構文、「～ようにする」「～ようにさせる」構文、「形容詞語幹+める」「形容詞語幹+まらせる」の使用上の分布を示し、それぞれを比較する。そして、使役体系全体における「～く(に)する」「～く(に)させる」構文、「ようにする」「ようにさせる」構文の位置づけを行う。最後に、今後の課題と展望について述べる。

審査の結果の要旨

日本語述語文における他動化及びこれと密接な関係にある使役化は、日本文法研究上重要な問題の一つとして、以前から数多くの研究者によって論じられてきた。しかしながら、その議論は主として動詞述語文についてのみ行われてきており、状態述語文は取り上げられることすらないに等しかった。それは、それが状態を表す表現であるという性格によるが、もとより状態述語文であれその他動化・使役化が行われないうけではない。本論文は、ここに注目して、日本語状態述語文の他動化と使役化のあり方全体を解明しようとする意欲的なものである。すなわち、本論文はその主眼を状態述語文の他動化・使役化の特徴の解明に置きながらも、最終的にはそれと動詞述語文の他動化・使役化との相互関係の究明に向かう、つまり、日本語述語文における他動化・使役化の全体像解明に向けて道筋を付けようとしている。

本論文が解明した事柄の中で、取り分け注目されるのは次の3項である。

- (1) 述語が形容詞、形容動詞、また「名詞+だ」で構成される状態述語文にあっては、状態の他動化・使役化は間接的に行われること。そして、その変化には「なる」「する」「させる」間における自他・使役の関係が関与していること。
- (2) 述語が可能動詞、「可能動詞+ない」「動詞+やすい/にくい」、また「動詞+たい」などで構成される状態述語文においても、(1)と同様の特徴が指摘されること。特に「動詞+ない」の場合、動詞の持つ状態性が強ければ強いほど「動詞+ない」全体の状態性も強くなり、他動化と使役化も成立しやすくなること。なお、この形式の場合その動詞は一項述語でなければならないこと。
- (3) 述語が「ようにする」「ようにさせる」の状態述語文でも、やはり(1)と同様の特徴が認められること。また、「～ように」は補文化辞の役割を負っているが、その補文は他動化と使役化の結果を表していること。

なお、本論文は論旨明快でかつ説得力がある。それはよく吟味された例文を土台として、状態述語文の他動化と使役化を構文的観点と意味的観点から、また、他動化と使役化の選択原理を主語のコントロールの範囲という観点から徹底的に追究していることによるが、これもまた特筆に値する。

ただし、分析にやや不徹底なところもまま見られる。例えば、形容詞から派生した動詞における自他や使役化などについては動詞の意味が関与していると述べながら、どのような動詞がどのように関与しているのか、その考察にやや甘さが認められる。

以上、今後に残された課題も若干あるが、総じて本論文は日本語述語文の他動化・使役化の研究に大きく寄与するものとして高く評価される。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。